

卷末資料

目次

1	会津松平氏庭園歴史と経過	1
2	文献資料	2
①	『御薬園の由来つゝれ草』（翻刻）	2
	『御薬園の由来つゝれ草』 解題 高橋充	8
②	『會陽雑誌第六號』	10
③	『會陽雑誌第八號』	10
④	『會陽雑誌第九號』	10
3	平面図	12
①	『御薬園畧図』	12
②	『御薬園パンフレット』	13
4	新聞記事	15
①	重陽閣に関する記事	15
5	薬用植物出版物	
①	御薬園薬用植物目録	18
②	御薬園の薬用植物	21

1 会津松平氏庭園歴史と経過			
時期	領主・藩主・ (管理者)	出来事	出典
至徳年間（1384～1387）	蘆名直盛	旅の老人朝日保方が大田谷地に泉を発見し、そのお湯で風呂を沸かし病気の喜助を助けたことにより薬園と名付けられた。	『御薬園の由来つゝれ草』
		泉の傍らに朝日神社を建立し、泉を鶴ヶ清水と名付けた。	『御薬園の由来つゝれ草』
天正17（1589）年以降	蘆名義広	摺上ヶ原の戦いで伊達政宗に敗れて以降、御薬園は荒れ果てた。	『御薬園の由来つゝれ草』
正保20（1643）年～	保科正之	この地を整備し保養場とした。	『御薬園の由来つゝれ草』
寛文10（1670）年	保科正経	園内に薬草を植えたことにより御薬園と「呼ばれるようになった。」	伝承
元禄年中（1688～1704）	松平正容	所々整備し「御薬園」と改めた。	『御薬園の由来つゝれ草』
元禄5（1692）年5月6日		「新御薬園」に落雷	『家世実紀』
安永年間（1772～1781）	松平容頌	目黒浄定により庭園改修。	『御薬園の由来つゝれ草』
寛政2（1790）年3月6日		籍田の儀式執行	『家世実紀』
嘉永年中（1848～1854）	松平容敬	御薬園の傍に田畑整備	『御薬園の由来つゝれ草』
明治元（1868）年	松平容保	戊辰戦争により表門焼失	
		戊辰戦争時、西軍の療養所となる	
		戊辰戦争後、新政府軍が御薬園接收	
明治2（1869）年		御薬園で厚姫、容大誕生	
明治3（1870）年		松平家が御薬園退去	
明治6（1873）年	松平家	有志が買い戻し、松平家に献上	
明治15～16（1882～1883）年		御茶屋御殿2階建建物増築	
明治16（1883）年		松平容保一家居住	
昭和7（1912）年10月19日		心字の池周辺が名勝指定される	
昭和28（1953）年	松平家（財団法人松平保松会）	財団法人会津保松会により維持管理開始	
		一般公開開始	
昭和48（1973）年		重陽閣移築	
昭和54（1979）年6月25日		薬草標本園等の追加指定を受ける	
昭和62～平成2（1988～1990）年	会津若松市（財団法人松平保松会）	会津若松市が松平氏から買い上げ	
平成3（1991）年度	会津若松市（会津若松観光ビューロー）	庭園管理を会津保松会から会津若松市観光公社に移管	
平成18（2006）年度～		指定管理者制度により、会津若松観光ビューローが庭園管理者となる	

2 文献資料

①『御薬園の由来つゝれ草』（翻刻）

御薬園の由来つゝれ草

抑御薬園の由来を尋るに、至徳年中の比

葦名氏時なるや、小田山を切開き城を築ん

とせし折に、いつくともなく数十羽の丹頂の鶴

飛来り、城となすへき其上を舞遊びつゝ

通ひくる、数日飛来る事なれば、いつれゑ行と

見送るに、若松の東、太田谷地ともふす広野あり、

其傍に壱軒の農家あり、其家は戸井越喜助

とて難儀の上に病氣にて、細き煙りも立兼る、

此家に永く滞留せし白髪の老人あり、何れの

人かしらねとも、朝日保方と申すなり、常々喜助

が正直の心さしをかんし入、貧困の難を助精して

永き月日を送りける、ある日此家の軒近く数

十羽の鶴飛来り、谷地田へ落て遊びをる、水

の溜りし所にて、水をあび御城の方へ飛て行く、

又立帰り又も行、数日重る事なれば、保方ふしき

におもひけん、鶴の落たる所を尋ねて見れば

谷地田よりもれ出る清水あり、其傍に溜り水

井の形ちして水深き、是も本よりもれ出る清

水の中を見れば、光り輝を、ふしきにおもひ、其

を取上げ見れば、小金の札切符ありて、其文字は

此水は薬なりとありければ、保方大きに喜ひて

其水汲て風呂をたき、病氣なる喜助を入、看

病なせは、其しるし二日三日と過ぎるに、病氣

全快なすなれば、七日たゝさる其内にもとの體

となりけり、此事世上ゑもれきこへ、病ある其

人は我もくと風呂に入、何の病によらず、壱枚紙

をはく如く全快なせは、ひにまさり入来る

人も多ければ、今は湯治の場所となり、誰云ふな

く、此場所を薬園とぞ名附たり、喜助は此家

主なれば、何不足なく暮しける、ある日朝方

老人は喜助始め湯治する其人々に物語り、我は

当年百十歳、日本国中残りなく廻国なす

と申せとも、身を納へき土地はなし、此地は古今の

靈地にて尊き人も入来るぞ、三とせあまりも

此家に世話に成しか、御城の成就せしの儀見届

て、今は此世に望なし、形ちなくとも魂魄は此地

にとゝめ、御城は鶴か城と名附たり、谷地より出る

清水をは鶴か清水と申すべし、深き所の清水

をは井戸の形ちになすなれば、鶴か井の薬水と

此世に申し伝ふべし、われなき跡で四四日を

まつとは寿福延命をきつくべし、我言ふ年

は百分の一、かならず疑事なかれ、委細を語れば、

老人はいつくともなく行給ふ、皆々
大きに驚きて

あちらこちらと鶴か井の辰巳にて、大きな
桜木あり、其傍に穴ありて、保方常々用ひ給
ひし草履あり、其辺に鶴の羽数多散乱し
桜の枝に短冊ありし、其歌は

一千歳を越て百歳となる我見

祈らは寿福さつけあたゆる と

ありければ、みなくきいのおもひをなし、さてこそ

朝日老人は鶴の化身か神なるに、此桜木の木根へ

朝日神社の宮を建て、喜助は朝夕に信心す

世の人は是を聞伝ひ、我もくと参詣す、鶴か

井の薬湯も次第くに繁昌す、ある日旅僧尋

ねきて暫くこゝに湯治なす、喜助は僧に打向ひ、朝

日神社の物語り短冊などを取出し、四四日と百分

の一言ふ事かわからさりしを尋るに、僧は答て

申すよふ、其保方老人は千百歳と成る年を

千百歳と申しては、人々ふしんにおもふゆへ、百十

歳と申せしは百分の一に為たる也、四四日と申するは

月の始めの四日より十四日・二十四日が四四也、惣而霊

地と申するは、四角四面の土地にして四方白眼みの庭

あれは、尊き人をまねくといふ、夫故四の字を用ゆ

るなり、けふは四月の十四日、四四日なれば、幸に朝日

神社をはいすべし、短冊え一句の歌を書き

其俣貌は消失たり、短冊の其歌は

四海浪納る御代の目出たさよ

末世栄ふるさとは此里 と

ありければ、よくく歌を詠るに、去年四月の十四日

桜木に残しあたへる短冊とおなし筆跡の事

なれば、正しく朝日の神ならん、喜助は跡をふし

おかみ、もつたいなや、ありかたやとますく

朝日の御神と一心籠て信心す、其利益あらたて遠近とな

く参詣す、鶴か井の薬湯も世に弘まれば、今

ははや薬園湯治と繁昌す、喜助は富貴の身

となりて、家を建、庭を築き、命は百十歳めで

たく子孫過しうち、世の盛衰は是非もなき、

天正年中芦名十世義広か代なるか、伊達政宗

にせめられて、摺上ヶ原の戦争に、自然此地も荒

はてゝ、人も通らじ折からに、正保年中の事と

かや

土津大神御君は御野先より此薬園に御立寄

しはらく四方を御なかめ、御名君の事なれば

稀なる霊地と御覧して、時々御入あらせらる

御保養場と御取立再建ありしほとなれば、御寿

も永くし、御名君と賞したり

元禄年中の事なるや

徳翁靈神御君は所々御普請もあらせられ
御藥園と改る、他の者入事ならすして
番人を附おかれ、ある時旅僧尋ねきて、此館の
御内に尊き神と藥湯のありし事を聞伝
ひ、遠々尋て参りたり、参詣させて給ひかし
と門番をたのめとも、こゝは館の御庭にて尊き
神も藥湯も此家のうちになし、門内入事
かなはじと言はれて、僧は是非もなく立戻り
つゝ、夕暮に御藥園の外廻り鶴か清水
に夜更まで念仏を唱ひしよし、夫より夜
毎に此清水にて念仏のこゑきこへるとて
自然其後に此清水、念仏清水と云伝ふと
もふすなり

安永年中の事とかや

容章^{アキ}靈神御君は庭の形も築直し、庭

は古今の名人目黒城庭と申す者、庭を直せし
其時は北の方なる瀧口へ雨龍か通ひしと申
せしなり、今残りある御茶屋御殿の形ちをは
辰野源左衛門普請奉行にて出来し事とあり
嘉永年中の事なるや

忠烈靈神の御君ハ思召に叶ひし靈地とて
時々御入らせ給ひしが、此御園の傍に少しの田

畑を拵らわせ、農民難苦を御察し、下をあは
れみ給ふとかや、鶴か清水を御尋在て、此跡へ
桜木を植置くへしとありければ、植置きたりし
桜木も、戦争の後ハ打過きて、又も植立申也
御老中御勤ありし御大名数た御止館に相成し
御藥園

明治二巳年には

容保御君御子厚姫君、此御藥園にて三月二十

一日御誕生

容大御君御同所、六月三日御誕生、御幼名慶三

郎殿と奉申御若君也

御二方、斗南御入部後は

四條殿御止宿館に相成居し御藥園、高位

高官尊き人の御入給ひし会津第一の靈地なり

こゝにふしきの吉事あり、若君の御誕生在し

御藥園の水鉢と申すは、内同前之所にて、月日もさゝし

水もなし、草木の生る場所にあらず、若君の生れ

させ給ひしのち、いつの間にかはしらねとも、此石鉢の

根の辺り十七株の稲出て、其いきほひは只なら

ず、日に増し勢々のひるゆゑ、皆々喜ひ祝ひつゝ、

此よし東京の御館へ申上、君ハ稲葉の屋敷にそ

いらせ給ひし折なれと、こまくと申上、御側の家臣

一統にめてたき事とよろこひて、御祝儀として

短冊へ歌をさゝけし事とかや

其歌左に記す

若君の生れさせ給ひし御薬園の砌、石鉢

の辺に十七株の稲出たりと承るに、唐土の一蕾九

穂のためしにもかよひて、いとめてたき祥瑞

なめれは寿きたてまつる、長歌短歌

常盤木のかはらぬ色を里の名に かけて

よろしき若松のわか子の君のあらましに

薬の園にくすしくも、生ひ出し稲はたまち

ほふ神やまきけん、あしひきの仙人をしも

うゑつらん、鋤もかへさす、水もしもひかぬみき

りに、おのつから茂り榮て梓弓八束足穂に

みのるへきけしきを見るに、其穂のあした夕

にたけ立て、延るか如くすこやかに、おひたち

ましてしろしめす、国内の四方に御寶を

なて納つゝ、豊かなる千五百穂の秋のいよ

ひさに、さいはひまさむしるしなるかも

返し歌

ほともなく立栄ゆへき花か世の

たのみもかゝる富貴の露

喜長 加藤内記

生出し八束足穂のかすくに 御国をしめて君栄ひませ

俊輝 赤羽鉄太郎

生出し御国の稲も栄ゆへき 君にあひてや千々にみのらん

忠貫 杉田秀之助

ほともなく君か八千代の栄ゆへき しるしとみのる庭の富草

祐邦 伊東左膳

またも其君に満んしるしにや

御国の庭に生る富草

直雅 永瀬丈之助

自から君の御国に生いてゝ

末富草のたのもしけなる

重元 富田五八郎

万代の榮て見せん生出し

君か御国の八束稲の穂

佐藤徳赤 山本喜兵衛

穂に生るおましの庭の稲かつら

千とせをかけて君ぞ見るへき

山本胤久 佐藤元之助

生出し御国に千代の秋籠て

八束の稲の穂の見ゆるかな

長裕 堀伴助

君か世に立帰るへきかけなれや

園生にみのる稲の足穂は

近成 内田藤八

此殿のみたらしの辺におのつから

栄もしるし生る富草

秀実 篠沢虎之進

栄ゆへき後のたのみの種もいま

出る稲葉そ豊かなりける

右十二名御祝歌として君へ上しとかや

十七株の其稲ハ、熟田の米よりもよくみのり、

東京へそ登せられ、御膳米に成候由、米はめて

たき文字にして、よねの守と祝ふなり、御薬

園にて御誕生まします若君は、朝日神社の

御附添へ御寿も限りなく、御君も今に秀出て

御名君と輝くは、御代万歳と納るも頼もし

くこそおもふなり

偕鶴か城と申するは、世にも稀なる名城にて

変のありしを悲みて、御城の名残とおもひし

か、戦争の起る正月の始の方より数十羽の丹

頂の鶴飛来り、其見物は朝毎に貴賤群

集なし、平人にてはわからねは、吉事とおもひ、面

面はてよろこび、まておるうちに、無実の罪を

蒙りて、日本一手にうちこそり、朝敵なとせめ

よする、是非なく籠城なしけるに、押寄る其

人数幾千万か数しれす、城を取まく八重十

重に大砲小銃打揃攻る中葉の事なるが

天守の上へ丹頂の鶴か頭れ出にける、数多の

人数入替り、幾日いく日攻るとも朝日神社の

御神力籠て置たる城なれハ、鉄石よりもまた

かたく落城すると言ふ事なく、敵も味方も

倦れはて日数を送る、そのうちに御降伏と申

入、上を恐るゝ事なれば、城を早速明渡し、鶴

か城と申するは、鶴の附添ふ事なるか、城より辰

巳の方にして、纔隔てゝ若葉丁御鶴部屋

とて建おかれ、幾とせとなく御寵愛ありし

丹頂の其鶴も戦さの起るしらせにや、戦争

以前の事なるが、鶴もむなしく成にけり、哀な

るかや惜むへし、追々城は取こはし、名高き

天守も取払ひ、今は形ちもありやなし、郭内

とても田畑となり、家中屋敷の其内に名木名

数多あり、霊地旧跡あるとても、影も形ちも消え

失て、尊き地所とわからねは、農人不浄を持はこ

ひ、一円あれし田畑也、御薬園と申するは、会津

第一の霊地にて、稀成る旧跡ともふしても、手広の

場所の事なれば、其修覆も及かね、草木は次第

に生ひ茂り、庭の形ちも荒はてゝ、誰も立寄

る人もなく、自然木を切り、石を取、田畑となるは

只一時、また荒はてぬ、其内に故ある霊地の

事なれば、末世末代残したく、是迄品々書

記し、聞伝えたる言の葉を、由来書ととりま

とめ、此世に弘め置ならは、末世に残る種ならん、
今を昔に成替て、朝日神社を再建し、屋敷
神とまつり建、信心功德の人々は、神の恵みも
あらたにして、其御神徳もあるならは、諸人参詣
怠らす、鶴ヶ井の薬湯も、諸人諸病のやまひ
を治し、全快あらたになすならは、多くの人の助け
となり、諸人入来る事ならは、霊地の場所も繁花
にて、修覆手入も行届き、末世榮ふる若松の
里と詠せし歌もあり、一には国の飾なり、若松の
里とあるからは、此若松に住める人、我みなもと、
おもふへし、朝日神社を氏神とおもふ心のある
人は、神の恵をあつくして、身立身日々に朝日の
登る如くなり、此由来書の言の葉は、過し
昔の事なれば、只偽やなき事と疑ふ人もある
ならは、また程立ぬ戦争は明治元年八月の
二十三日の事なれば、誰も忘るゝ人もなし、戦争
の年の元日に数十羽の鶴の飛きたり、丹
頂の鶴と申するは日本に住る鳥でなし、二十
三日の其間、鶴が城を宿として、七日此より寄
こそり、天守の上や城廻り、あちらこちらと散乱
し、朝は四つにもならざるに、いつ地廻行か立払
ひ、正月廿三日迄毎日通ひくるなれば、その取沙
汰も広く成、たとへ不見とも聞伝ひ、しらするもの

もなかりけり、八月廿三日には四方寄りくる其
人数大砲小銃打声は、山も崩るゝ如くなり、
其鳴音におとろかす、丹頂の鶴が顕れて
一七日の其間、天守の上を飛廻る、其節町
家の人々は、戦争の事に恐をなし、遠近野山
に身を隠し、見る人多くなきとても、嘶は一度
弘まれは、聞伝へさる人もなし、九月二十三日には
落城したる事ならは、籠城の其人数只老人も
助からず、罪なき命を失ひて、末々あしき名
を残す、御降伏となりければ、哀成りや、大勢
の身替りとなる鶴か城、不残人数引払ひ
御城も即刻明渡し、皆々命につゝ、かなく引
取たるも御城の落城せさるゆゑなるへし、
故ある御城の事なれば、朝日神社の御恵み
善悪とても左の如く、悪は一旦強くとも、次第く
に弱くなり、善は自然とたちあかり、無実
の罪も消とけて、日本にては第一の義ある国
そといはるゝも、神の恵とおもふへし、鶴ヶ城
と御園の由来をよく見るに、天地陰陽の土地
にして、朝日神社は御薬園、其御神徳は御城
にて、大勢の其命御救ひありしとおもふ也、
戦争も過て一昔し、送る月日ははやけれど
御薬園の修覆をは誰もなすものあらされ

は、既に田畑となる事を保英老人^{ヒデ}悲みて、朝日神社と鶴ヶ井の薬湯再建なすとても、諸人恭ふ御神、御神徳顕したまひとねんししに、ふしきの事が顕れて、鶴か井の辺なる梅の木ありし、其枝に小金の花か咲にけり、此は明治十年の十二月十四日、朝日に光りし花あるを立寄見れば、梅の木へ大豆の形なる金色の数十万の実なりたり、手に取見ればかたき事、金の如くに見へたりけり、段々日数立ぬれば、自然熟して其中に、鶴の形の実ありけり、是迄聞伝たる事もなき、古今稀なる珍らしき、今現在の事なれば、正しく朝日神社の御神徳、見れば嘶の種と成、鶴の形の実あるのも、鶴ヶ井の薬湯か世におこなわれるしとぞ、神のおしゑとおもふ也

明治十一年一月十四日

保英老人撰

大正五年二月神指村佐瀬一郎氏より借受謄写に付す

「御薬園の由来つゝれ草」

高橋 充

〔解題〕

「御薬園の由来つゝれ草」（以下、「つゝれ草」という）は、会津図書館所蔵の写本で、和綴じ本・一五丁（表紙は除く）、罫紙（一枚二十行）に墨書（筆書き）されている。末尾に「大正五年二月、神指村佐瀬一郎氏ヨリ借受、謄写二付す」と書かれており、大正五（一九一六）年に転写されたものである。神指村の佐瀬一郎とは、佐瀬三餘（一八六二―一九二三）として知られ、新聞記者・著述家であり、文化人でもあった。この時に借り受けたという所蔵本の所在や借り受けた人物は不明である。

本文末尾の記載によれば、原本の成立は明治十一（一八七八）年で、作者は「保英老人」とあるが、この人物の詳細も不明である。「英」の字には「ヒデ」というルビが振られているので、「ヤスヒデ」あるいは「モリヒデ」と読むのであろう。本文に出てくる「朝日保方」という老人にちなんだ筆名かもしれない。

内容については、題名の通り、御薬園の由来を説明したものであるが、要約すると以下ようになる。

①葦名氏の時代に、朝日保方という老人が、鶴か、神の化身として現われ、鶴ヶ井という薬湯と朝日神社が繁盛した

②天正年間（一五七三―九一）の葦名義広の頃に伊達政宗が会津へ侵攻して以後、江戸時代には盛衰があり、保科正之（土津大神）、正容（徳翁霊神）、容章（霊神 正容の子）、容敬（忠烈霊神）の代に、御薬園

はそれぞれ少しずつ姿を変えていった。

③明治二（一八六九）年に旧藩主容保の子息が御薬園で生まれ、水鉢に生えた稲にちなんで、君臣の間で和歌のやり取りがなされた

④戊辰戦争と、その後の鶴ヶ城の取り壊しとともに、御薬園も荒廃したことを嘆き、その再興を呼びかける

このうち、この由来が書かれた直接的な契機・動機は④であり、戊辰戦争から約十年が経過した時期の状況を背景として書かれたものと考えてよい。①②に関しては、その時期までに伝わった記録や伝承等をまとめたものと推測され、各時代の事実として正確かどうかは別途検討を要する。作者の人物像について、②の記述をみると、会津の歴史に関する一定の知識を備えており、さらに③の記述については、とくに旧藩主周辺での和歌の贈答のようすを具体的に情報として知ることができている。旧藩主の霊号や関係者（容章・容保・容大など）の名前は、改行して行の冒頭から書き出す平出というルールに従っており、旧藩主に対する敬意を強くもっていた。また、本文全体を通して、出来事的情景を彷彿とさせるような書きぶりや、とくに後半はリズムのよい文章になっており、文芸の才のある人物のように推測される。

明治十年代から、すでに御薬園の荒廃を憂う声があり、あたかも寺社縁起のような「由来書」をまとめて、その再興を広く呼びかける動きがあったことがうかがえる貴重な資料である。

なお、これまでの調査では、関連する資料が二件（A・B）確認されている。

A 「御薬園の由来つゝれ草」の類本

会津図書館所蔵で、昭和二十九（一九五四）年四月に「無名氏」より寄贈された同題名の翻刻文である。末尾に「会津図書館複写」と書かれており、内容は今回の底本とほぼ一致する。ただし仔細に対比させると、より多く濁点を付したり、仮名を漢字に改めたりしている箇所があり、同じ写本を元にしたかどうかは判断できなかった。

B 「松平家御庭園御薬園」喜多方史談会『北陽史談』第六年第十号 昭和七（一九三二）年

史跡名勝に指定された年に公表された文章であるが、その中に「故人某ノ記録セル『御薬園及朝日神社由来』があるとして「略記」されている。内容は「つゝれ草」と重なる部分が多いが、「御薬園及朝日神社由来」という表題の別の書物があつた可能性を示唆している。

全文の翻刻に当たっては、旧仮名遣いの一部や送り仮名（二、ハ等）は、現代の仮名遣いに改め、また読みやすくなるように、原文にはなかった読点（、）を適宜付した。

〈参考文献〉

近藤真佐夫「御薬園（会津松平氏庭園）再考」『歴史春秋』九五 会津史学会 二〇二四年

佐藤一男「佐瀬三餘の生涯―明治大正に活躍した会津の多彩な文化人―」『会津若松市史研究』六 二

②『會陽雜誌』第六號

○舊主松平容保君 舊主公には愈々本月廿五日東京出發にて當地へ來臨せらるゝ御日取りの處都合あり來月一日東京出發あり同六日來着せらるゝ由御住所御藥園の普請も有志人民の奮發にて三分通りは落成なしたれとも御來着までには全く落成も覺束なけれハとて假に東名古屋町諏訪氏方へ御住居なさるゝ由なり

(明治16年9月23日発行)

③『會陽雜誌』第八號

御藥園記 第一 湯溪居士

御藥園は若松の東南端に在る数頃の庭園にして世々藩主の遊園たり數百年以来の故園なるを以て老樹奇石莓苔を生じ丘山池沼自ら天然の模様あり花卉緑樹繁蔚四時其觀を改めず園中鶴ヶ井と稱ふる大池ある水鳥は濯々汀沙に羽翼を伸ばし林鳥は嚶々樹林い囀り心意陶々と氣極りなし立て眺めは嵐光山色一望瞭然彼の遙かに烟摩き雲晴る々は何そ是れ磐梯山の晴嵐喬松濃緑四時に變せざるは是れ飯盛山白虎隊の墳墓たり往昔源義家戰勝築壇功名を不朽に傳ふる一箕山其西北にあり紅霞芳雲棚引く是れ大夫櫻種時の櫻たり松風颯々枕邊に響く是れ慶山の夜雨其下に薰煙颯るは陶器焼場たり山青く水明かなつ是れ愛宕山の秋月鐘聲山を出て水を渡り餘音朗々たるは天寧寺の晚鐘樹暗く山白き是れ小田山の暮雪倒景樹に在り 楼樓溪流に望み簾○翻かへる翻かへる是れ東山の夕照腕車母衣を揚げ湯川の岸上に往来する是れ夜郎ヶ前の歸帆北方一望水田に出没する是れ北田の落鴈なり八勝五景の觀備はり奇趣

絶景悉く寸眸の中に聚り實に仙洞境と云ふべき所なり今や此御藥園の由來を尋るに文治年中輩名氏小田山を切り開き城を築かんとせし折いづくともなく數十羽の丹頂の鶴飛び來り城となすべき其上を舞い遊びては若松の東太田谷地と稱ふる廣野へ飛行きて餌を需むるあり此谷地の傍に賤か農家あり戸井越喜助とて正直の心さしの者なりしが家は貧しく細き煙も立兼ねるが上に年頃の難病に罹かゝり困難一方ならざりし年久しく此家に假ひ住居せし白髪の人あり朝日保方といふ喜助が心實に感じ貧苦を助け永き月日を送れり或る日此家の軒近く數番の鶴飛び來り谷地田へ落ちて水を泳くを見傍近く寄り見るに谷地田より漏れ出つる清水あり千歳の齡を保鶴の游泳する清水なれば藥にもならんと思ひ此水を汲みて風呂をたき病身なる喜助を入浴なさしめしに日ならずして全癒しければ世間へも藥湯の名聞え入り來る人の多今は湯治場となり誰いふとなく此場所を藥園とそ名けたりと是れ名稱の因て起る所なりと云ふ

④『會陽雜誌』第九號

御藥園記 第二 湯溪居士

今はしも藥園名湯の世に隠れなく廢を起し死を回す効驗著しくありければ遠近の人々數多集ひ來るより年頃貧しき煙を立てし此家の主人喜助はこれか爲産を興し生計の道も最と豊かになりけり問もあらせず此靈水を發見せし羈旅の客朝日保方は何處へ行くとはいはずして立去り通信あらず喜助も此老人の爲禍を轉じて福をなして喜ぶ身の富有の家とはなりたりとて旭日に馨る櫻木の下に宮社を建て

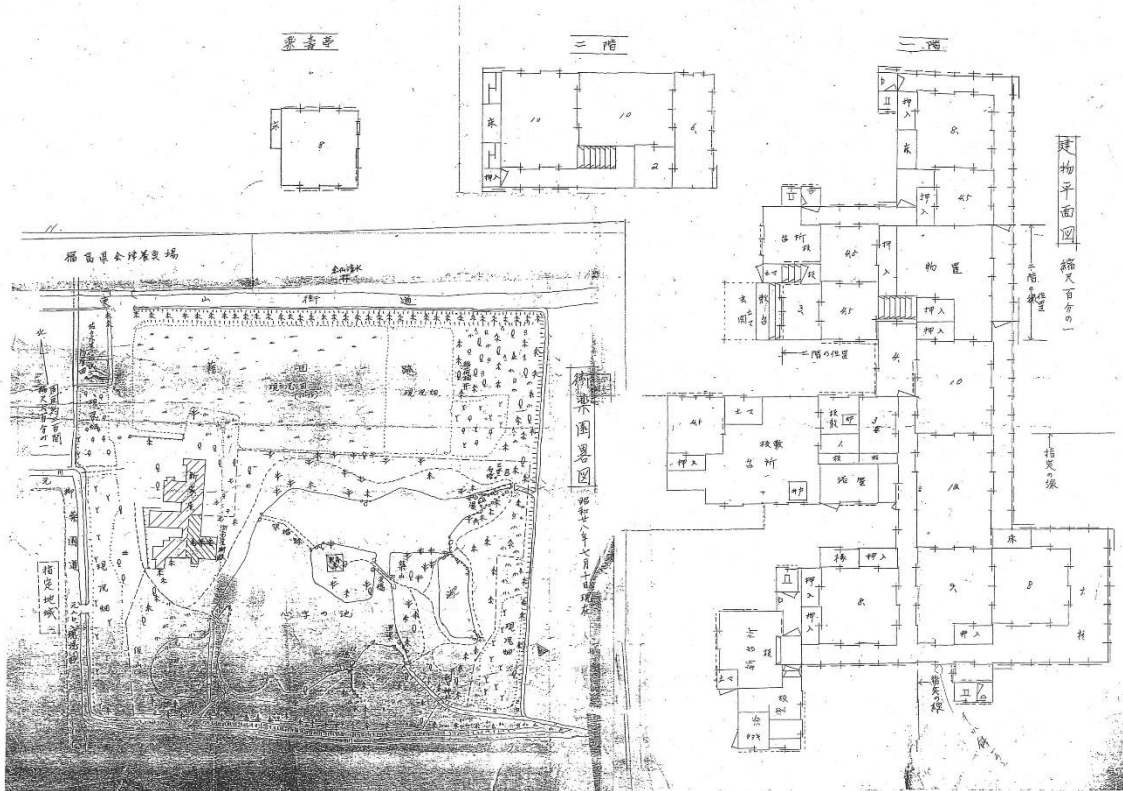
此老人を朝日神社と崇め祭り此靈水を鶴ヶ清水と名附け池の深き所に井桁を造り鶴ヶ井と称稱したり時しも僧侶行脚の此地の絶景稀なるを聞傳て尋ね來るもの多かる内に或る日訪ひ來りし旅僧は此園の景色に愛て又靈水を譽て餘念なく立去を名殘惜しく思ひつゝ左の和歌を短冊によりて残せり

四海波をさまる御代の目出たさよ末榮ふる若松の里

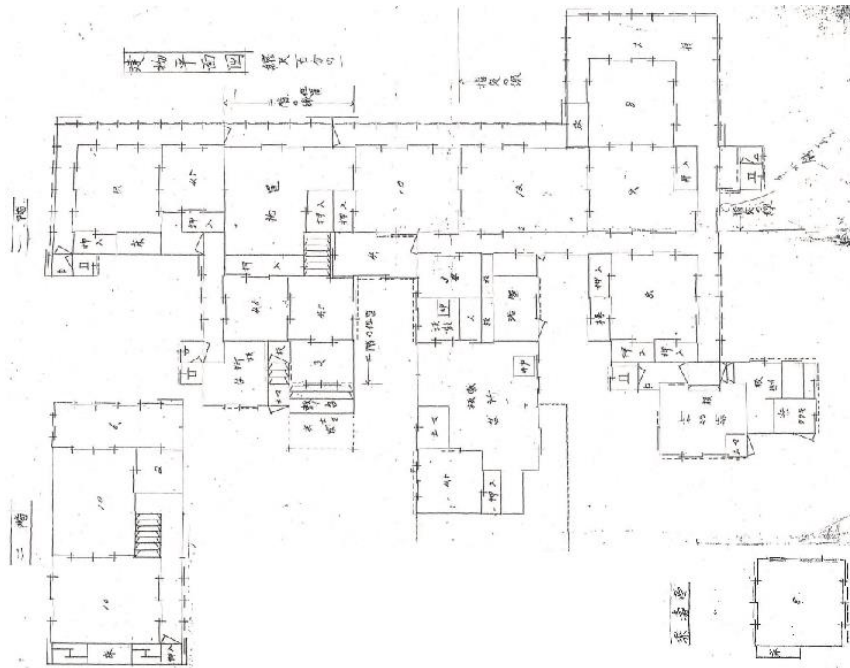
經る年毎に賑ひ來て家を建て庭を築き壽く命は百十歳の目出度子孫過るうち世の榮枯盛衰は是非もなき天正年中輩名十世義廣の代なるか伊達政宗に攻られ摺上ヶ原の戰爭に自然此地も荒れはてゝ人も通はぬ園となりき年經て正保年中の頃とかや保科正之公御野先より此藥園に駕を枉させられ四方の景色の眺めよきより別園となしたまひ御小憩所の建築も出來たり降りて元錄年中正容公御藥園と改稱し給ひて修理を加へらる又安永年中の事なるや容章公庭師目黒城庭を東京より招き園庭を改築なし給ひ今尚ほ殘る御茶屋御殿は當時の御普請奉行辰野源左衛門氏の經營にかゝるものなりといふ忠烈公の世に至り庭中に田園畑園を設け農民の辛苦を親しく知り給へたりと實に賢しこき君と申すべし戊辰の際には御老中の諸侯方止館あり明治二年厚姫君容大君には當園にて降誕あり舊藩主南部へ御移住の後ハ四條殿の旅館となりたり後亦舊藩主の所有地となり屋守を置き四民に遊覽を許されたれば春の花見夏の夕涼み秋の紅葉見冬の賞雪四時風流雅客の跡絶えず賑ひたり今度又舊藩主の縁變らぬ若松の千歲榮ふる鶴か井の此園に御住居遊はすとは目出度ことにこそと拙き筆をとりて斯くはものしつ

3 平面図

①『御薬園畧図』

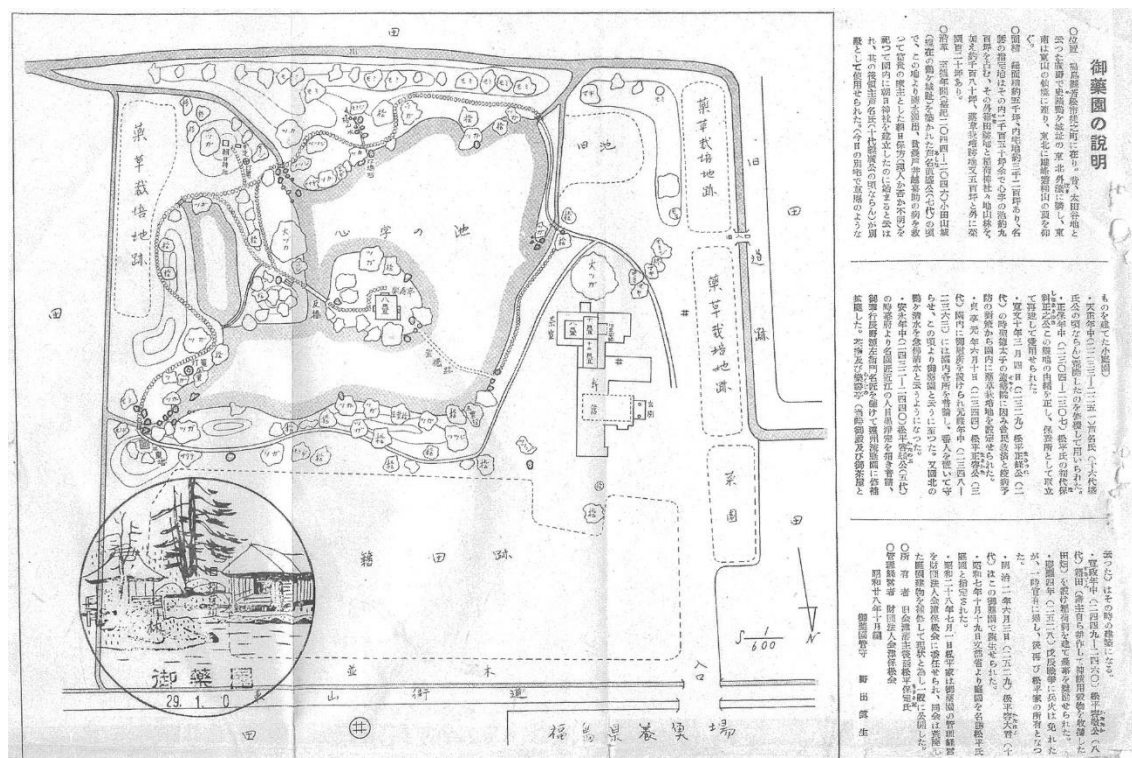


〔巻末図1〕『御薬園畧図』



〔巻末図2〕『御薬園畧図』（建造物部分）
（東が上になるように編集）

②『御薬園パンフレット』説明文



〔巻末図3〕『御薬園パンフレット』

御薬園の説明

- 位置 福島県若松市徒之町に在り。昔、太田谷地と云った廣野で史蹟鶴ヶ城址の東北外濠に隣し、東南は東山の仙境に連り、東北に雄峰磐梯山の頂を仰ぐ。
- 面積 総面積約五千坪、内地地約三千二百坪あり、名勝の指定地はその内二千五百五十坪で心字の池約九百坪を占む、その外籍田跡地と稻荷神社々地山林を加え約千八百八十坪、薬草栽培跡地又五百坪と外に茶園百二十坪あり。
- 沿革 至徳年間（皇紀二〇四四―二〇四六）小田山城（現在の鶴ヶ城趾）を築かれた芦名直盛公（七代）の頃で、この地より薬水湧出、貧農戸井越喜助の病を救つて富貴の家主とした朝日保方（現人か否か不明）を祀って園内に朝日神社を建立したのに始まると云われ、其の後領主芦名氏（十代義廣公の頃ならん）が別荘として使用せられた。（今日の別宅で草庵のようなものを建てた小庭園）
 - ・天正年中（二二三三～二二五一）芦名氏（十六代盛氏公の頃ならん）荒廃したのを修覆して用いられた。
 - ・正保年中（二三〇四～二三〇七）松平氏の初代保科正之公この霊地の由緒を正し、保養所として取立て再建して愛用された。
 - ・寛文十年三月四日（二三二九）松平正経公（二代）の時聖徳太子の施薬院に因み貧民救済と疫病予防の対策から園内に薬草栽培地を設定せられた。
 - ・貞享元年六月十日（二三四四）松平正容公（三代）園内に御慰所を設けられ元禄年中（二

三四八～二三六三)には園内各所を普請し、番人を置いて守らせ、この頃より御薬園と云うに至った。又園北の鶴ヶ清水を念佛清水と云うようになった。

・安永年中(二四三二～二四四〇)松平容頌公(五代)の時幕府より名園匠近江の人目黒浄定を招き普請、御奉行辰野源左衛門名匠を輔けて遠州流庭園に修補拡張した。茶室及び樂壽亭(当時御殿及び御茶屋と云った)はその時の建築になる。

・寛政年中(二四四九～二四六〇)松平容敬公(八代)籍田(藩主自ら耕作して神饌用穀物を収穫した田畑)を設け稲荷祠を建て農事を奨励せられた。

・慶應四年(二五二八)戊辰戦争に兵火は免れたが、一時官有に帰し、後再び松平家の所有となった。

・明治二年六月三日(二五二九)松平容大君(十代)はこの御薬園で誕生せられた。

・昭和七年十月十九日文部省より庭園を名勝松平氏庭園と指定された。

・昭和二十八年七月一日松平家は御薬園の管理経営を財団法人会津保松会に委任せられ、同会は荒廃した庭園建物を補修して現状と為し一般に公開した。

○所 有 者 旧会津藩主後裔松平保定氏

○管理経営者 財団法人会津保松会

昭和廿八年十月

御薬園管守 野出眞生

4 新聞記事

①重陽閣に関する記事



〔巻末図4〕福島民報 昭和48年（1973）3月16日付



〔巻末図5〕福島民報 昭和48年（1973）8月6日付



秩父宮妃殿下ゆかりの建物



重陽閣と命名

市長ら 新名所スタート祝う

会津若松市の御幸園に移築されていた秩父宮妃殿下ゆかりの建物が全工を終了、四日「重陽閣」という名前で華々しくオープンした。これで名勝・御幸園内には松平氏離宮、運用種物園のほか御茶屋御殿に続き、新しい名所が誕生した。

この建物はもとと会津若松市東山温泉新温泉旅館の古い建物。昭和三年に鶴津千代さんが秩父宮家へとつがれるさい滞在して会津の人々から祝福をうけたゆかりの旅館。たまたま今度、新温泉旅館が改装されることを伝える聞いた妃殿下のお声がかかり、松平家ゆかりの御幸園内に保存しようということになったもの。古川新太郎氏の寄付により三日から工事が進められていた。

もともとの旅館は木造二層建てで、各階にまわり廊下のある千鳥破風のせいかげな建築。しかし一階はすでに火災に改造されてしま

御幸園に移築完成 若松

暑さ忘れにバツゲン

《若松市内のデパート》
化物屋敷チビっ子に大モテ



子供たちの人気を集めるオバケ屋敷

つたことか、二、三階の部分を移築した。したがって完成した重陽閣は、二階がそのまゝ、一階は二階間、一階には十畳間、七・五畳間、十二・五畳間がある。

重陽閣の完成を祝う祝賀会は、四日前十一時から関係者約八十人が出席して重陽閣一階で開かれた。会津若松市長若松市長、松平参院議員らが祝辞を述べ、重陽閣のスタートを祝った。

小麦のネズミトリ
リットホン

7.00	モモ
8.30	夏
9.30	夏
10.25	夏
0.00	夏
0.40	夏
1.00	夏
1.15	夏
1.45	夏
2.00	夏
2.15	夏
2.30	夏
3.30	夏
4.30	夏
5.30	夏
6.00	夏

【8月7日】

秩父宮妃ゆかりの建物
「重陽閣」と命名

知名士集い、盛大に落成式

御薬園に移転、花々しくオープン

会津の宮さま、秩父宮勢津子妃殿下が昭和三年、ご結婚なさる時、会津の人々からお祝いをうけられたゆかりある家屋は会津若松市花春町の御薬園内に立派に再現され、四日午前十一時から新装なった同館で知名士約百人が集い、盛大に落成を挙げ、新館の名称を「重陽閣」（ちようようかく）と命名、披露した。今後は文化団体の各種会合、広く教養の向上を目指す人々、研究団体をはじめ、結婚式の披露宴会場などに利用され、ゆかりの建物は御薬園の名物として長く保存されることになる。

この新館は妃殿下が昭和三年、ご結婚なさるとき会津の人たちからお祝いを受けられたゆかりの建物で、同市東山温泉の旅館「新滝」内にあったが、同館ではこのほど、改築することになり、この思い出の家も取りこわすことになっていた。この話を昨春秋、妃殿下がお聞きになり「是非とも残してほしい」とご要望があり、新滝旅館の好意で、御薬園内に再現することになった。さる三月中旬に移転費四百七十万円で請け負った同市の東条建設工業と財団法人会津保松会が施工、このほど完成した。

建物は木造二階建てで、建て面積は約二百三十平方メートル。一階は玄関、ホール、六畳間三室、

移築された「重陽閣」



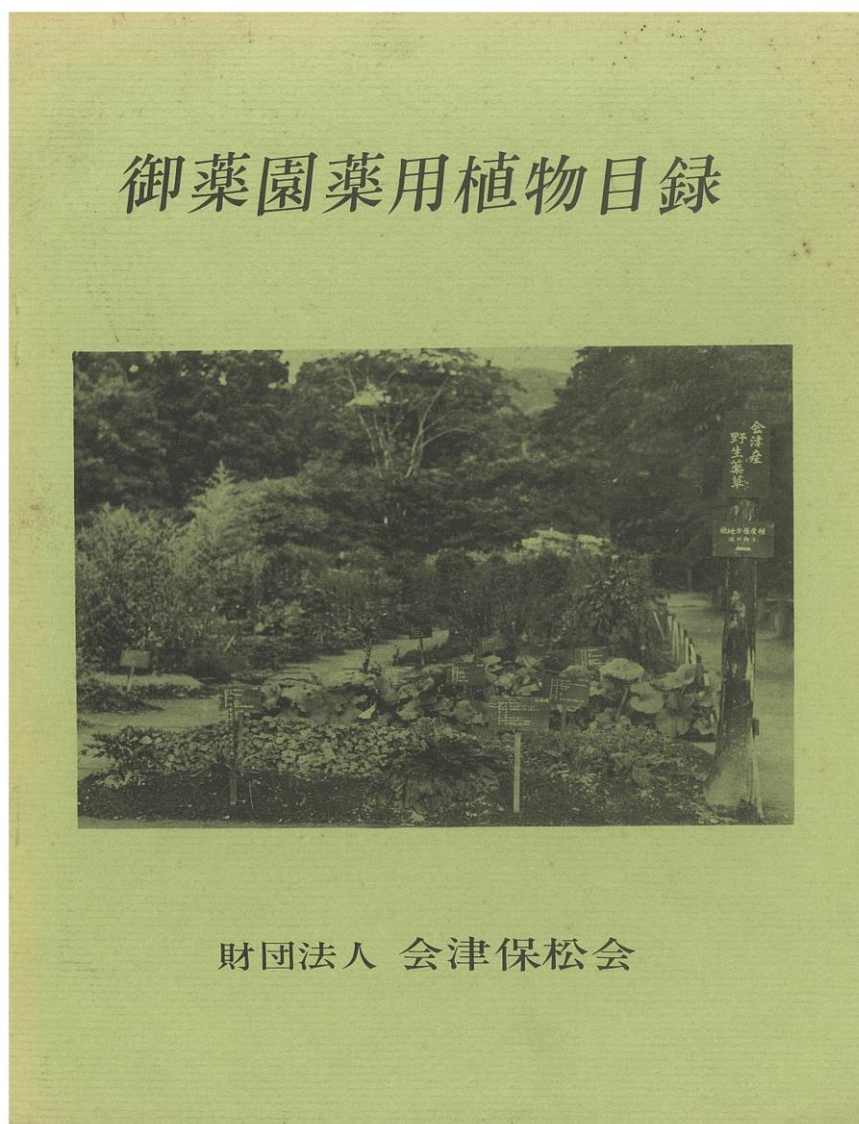
十畳間一室、四畳半一室、台所。二階は回り廊下付きで十二畳半、七畳半、十畳間の三室があり、これからは茶道、謡曲、俳句、活花らの研究会、結婚披露宴などに利用される。

落成式は目黒会津保松会理事の開会の言葉のあと、会津若松市内の会津能楽会による「鶴亀」「羽衣」の謡曲があり、牧原会津保松会理事長があいさつ、落成した新館を「重陽閣」（ちようようかく）と命名、披露した。ついで高瀬会津若松市長、松平参院議員、山田会津若松商工会議所会頭、五十嵐会津若松文化団体連絡協議会長ら来賓の祝辞があり、最後に山田流の琴「千鳥」を演奏して、式を閉じた。（『会津の歴史』）

【巻末図7】 毎夕新聞 昭和48年（1973）8月7日付
（小島一男編『新聞で見る会津の昭和史』歴史春秋出版、1997年）

4 薬用植物出版物

①御薬園薬用植物目録



発行日 昭和 43 年 10 月 10 日 (初版 公開 15 周年記念)
発行者 財団法人 会津保松会

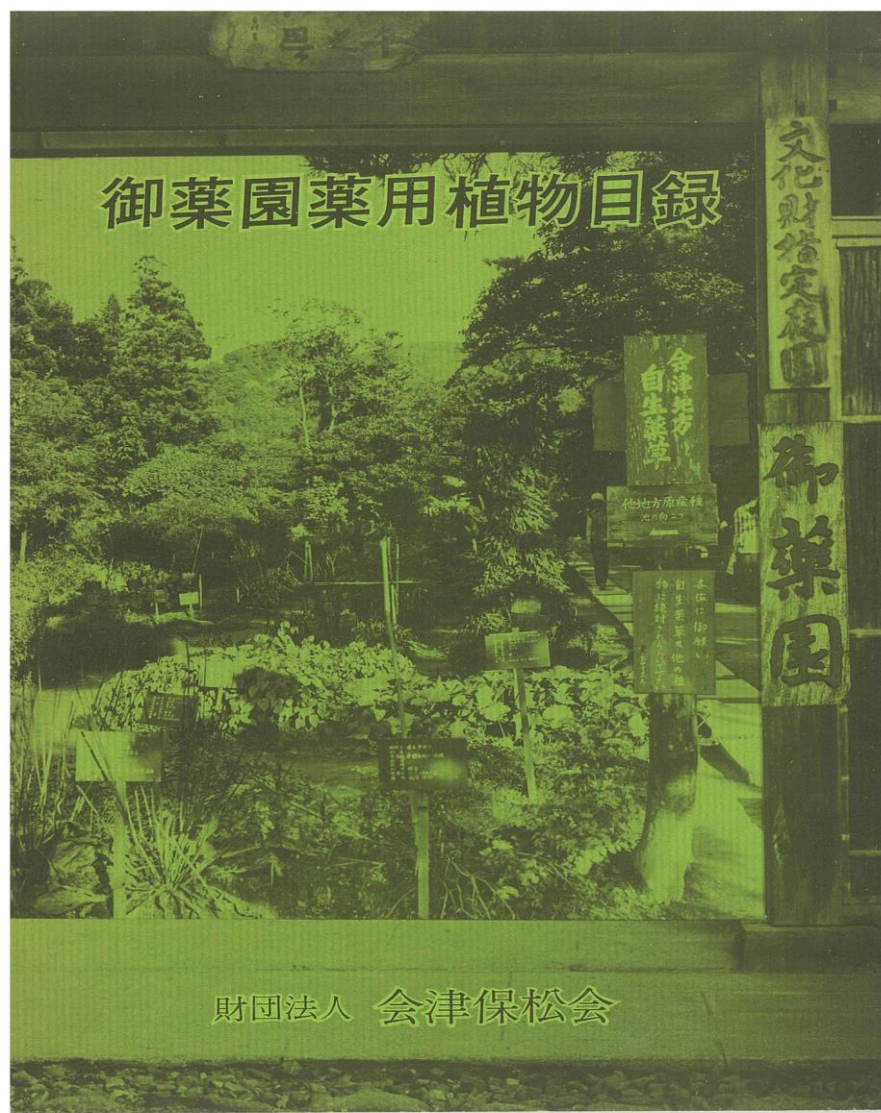
I 木本の部

- | | |
|-------------------|------------|
| (1) 常緑小高木・高木 | あかまつ他 19 種 |
| (2) 落葉小高木・高木 | あおぎり他 41 種 |
| (3) 常緑低木 | あおき他 15 種 |
| (4) 落葉低木 | あじさい他 42 種 |
| (5) つる性木本 (常緑 落葉) | あけび他 11 種 |

II 草本の部

- | | |
|-----------|--------------|
| (1) 双子葉植物 | あおじその他 224 種 |
| (2) 単子葉植物 | あまどころ他 82 種 |
| (3) しだ植物 | おしだ他 7 種 |

合計 441 種



発行年 昭和 51 年 9 月（再販）
発行者 財団法人 会津保松会



発行年 昭和 58 年 10 月 (改訂版)
 著 者 馬場 篤
 発行者 財団法人 会津保松会

- I 木本の部
アオキ他 137 種
 - II 草本の部
アイ他 349 種
 - III 菌類の部
オニフスベ他 9 種
- 合計 495 種

② 御薬園の薬用植物



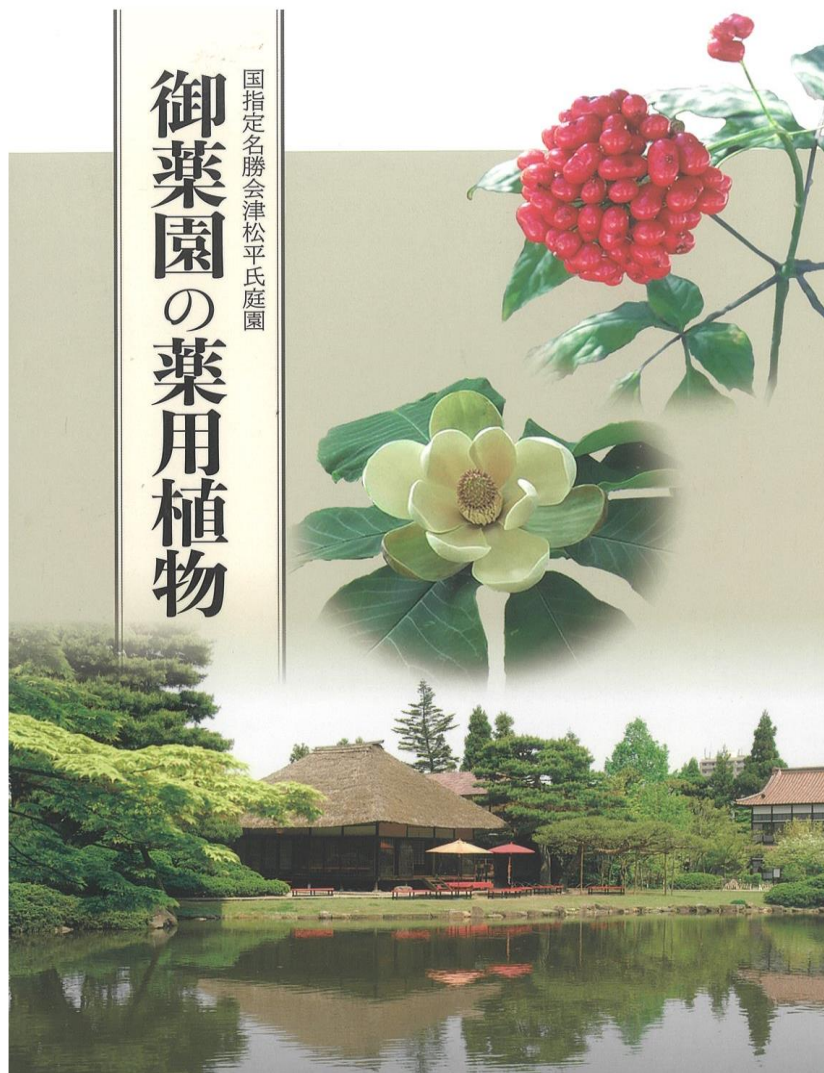
発行年 平成 23 年 6 月 (初版)
著者・編者 御薬園
発行者 一般財団法人 会津若松市観光公社

春 アイヅシモツケ他 165 種

夏 アイ他 194 種

秋 アキカラマツ他 44 種

合計 403 種



御薬園の薬用植物

国指定名勝会津松平氏庭園

発行年 令和5年3月25日（初版）
 著者・編者 池上文雄 三瀨忠道 秋葉秀一郎
 発行者 一般財団法人 会津若松観光ビューロー

アオツツラフジ他 349 種

学名・生薬名・薬用部位・薬効・原産地などの情報を盛り込む学術的な解説書